FAIRY　TAIL～魔神の王は二天龍と共に

ジャックアルバレス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

メリオダスは長い戦いから開放され眠りについた・・・　はずだった!?

彼は女神の力によって転生し、赤い龍と白い龍と共に彼の第二の人生が今始まる。!!

目次

プロローグ1 ―― 1
プロローグ2 ―― 5
プロローグ3 ―― 8
初仕事 ―― 12
交わることのない赤と白 ―― 17
前世の神器 ―― 21
VSエルザ ―― 25
エルザの罪 ―― 30
ミラの説得 ―― 35
リサーナの思い ―― 38
リサーナの死 ―― 45
暴走そして失踪 ―― 51
再開 ―― 57
ギルドへの決別 ―― 63
格の違い ―― 67
真実への一歩 ―― 70

プロローグ1

俺の名はメリオダス。

３０００年の戦争に終えてもう目を覚まさないはずの俺の目が開く。

そこは見知らぬ真っ白な世界だった。

メリオダス「此処は何処だ？俺は戦いを終えてもう死んだはずじゃ？」

俺がそう呟くと後ろから返事が返ってきた。

???「此処は転生の間よ」

メリオダス「!?誰だ！」

振り返ると其処にはメリオダスより少し大きな女がいた。（１６０ｃｍ位）

俺は振り返りながらの問いかけに女は態度を崩さずに答えた。

転生神「私は転生神、そしてここは転生の間よ」

転生神と名乗った女に俺は問い掛けた。

メリオダス「あのさ俺って死んだはずだよな？そしたらなぜ俺此処にいるんだ？」

俺のその疑問に転生神は呆れたように言い放った。

転生神「はー鈍い奴ねぇ、それはあなたを転生するために此処にいるに決まってるじゃない」

メリオダス「え？」

俺は耳を疑った。

メリオダス「マジ？」

転生神「ええ、おおマジよ、ただし条件があるわ」

メリオダス「条件って何だ？」

転生神「その条件と言うのは、この子達よ」

転生神がそう言うと後ろから赤と白のドラゴンたちがやってきた。

???「おい、此処は何処だ」

赤い龍がそう言うと転生神が答えた

転生神「此処は転生の間よ二天龍さんたち」

メリオダス「二天龍？」

メリオダスは二天龍と言うワードが分からずにいた。

転生神「ああ、紹介してなかったわね、此処にいる二体の龍は別の世界で二天龍と称された赤い龍と白い龍よ、ほら、あなたたちもご挨拶なさい」

転生神の問いにまず赤い龍が答えた。

ドライグ「俺の名はドライグ、お前とは違う世界でウェルシュ・ドラゴン、赤龍帝と称された龍の一体だ」

それに続いて白い龍も口を開いた。

アルビオン「我の名はアルビオン、ドライグと同じ世界でバニシング・ドラゴン、白龍皇と称された龍だ」

メリオダス「俺はメリオダス、俺が生きていた世界では七つの大罪の団長にして

魔神族の王だ」

俺もアルビオンとドライグに自己紹介をしたすると、転生神が口を開いた。

転生神「これからあなたたちにはある世界へ転生していただきます」

その言葉に二天龍の二人が口を開いた。

ドライグ「おい、なぜおれがこいつとなんかと一緒に別の世界になんぞに行かなくてはならんのだ」

アルビオン「そうだ、なぜおれがこんな赤いのなんぞと一緒に」

此処で俺が口を開いた。

メリオダス「おいおい、なんで二人はこんなケンカばっかりしてる

んだ？」

転生神がこの問いに答えた。

転生神「この二人は元の世界で別種族の戦争中に割り込んで戦争の最中に大喧嘩を始めたのよ」

俺は二人を放置し転生神に言葉をつむいだ

メリオダス「それで？俺たちの行く世界とはどんな世界なんだ？」

転生神「あなたたちが行く世界は、魔道士という人たちがいる世界よ」

へ～魔道士か面白そうだな

転生神「それで、あの馬鹿ドラゴンたちを引き連れて欲しいの」

メリオダス「わかった、行こう」

転生神「じゃあすぐに転生させるけどいい？」

メリオダス「ああ、いいぜ」

転生神「じゃあ、第二の人生を楽しんでください」

（俺）（二天龍）

その言葉のあと魔神王と馬鹿ドラゴンたちの第二の人生が始まった。

プロローグ２

（メリオダスサイド）

よう、俺はメリオダスだ。
俺はあの紅白ドラゴンたちと一緒にこの世界に来たのだがあの二人は何処だ？
メリオダスが二人を探していると空から一通の手紙が降ってきた。

メリオダス「ん？これは何だ？」

その手紙の差出人は転生神だった。

転生神「あなたが転生したら、二人を探すと思って書きました。あの二人なら貴方の体の中に宿しておきました。貴方が念じれば自ずと二人は出てくるでしょう。」

俺が念じれば？どうゆうことなのだろうか

転生神「分からなかったら、とりあえずあの二人のことを思い浮かべてください、なおこの手紙は読みきった後燃え尽きますのでご注意を、後は自分でがんばって、これは貴方の人生です、わすれてた、この世界での貴方の寿命はこの世界の魔道士と同じくらいにしておきました、今の貴方は１０歳ほどです、これからは伸びなかった身長も伸びていきますよ、もちろん前のように魔神の力も使えますのでご心配なくじゃあこれで。」

俺が手紙を離した瞬間、その手紙は燃え尽きる。

メリオダス「とにかく、ドライグ達を呼んでみよう。」

俺はとりあえず、ドライグとアルビオンの名前を叫んでみた。

メリオダス「!!ドライグ!!、!!アルビオン!!」

すると、俺の右手に赤い篭手が、背中に白い翼が現れた。

メリオダス「うわ!、なんだこれ!!」

ドライグ「なんだこれとは、失礼なお前が呼んだのであろう。」

アルビオン「ああ、まったくだ。」

俺の背中と右手から聞いたことのある声がした。

メリオダス「え?、まさかドライグとアルビオンなのか?」

ドラアル「「ああ、そうだ。」」

俺は驚いた、まさか転生の間にいたドラゴンたちがこんなとこにいるだなんて思いもしなかったからだ、ここで俺の疑問気になっていたことを聞いた。

メリオダス「もう、元の姿のお前たちには会えないのか?」

俺が少しへこんだように聞くとアルビオンが答えてくれた。

アルビオン「いやそれはない、俺たちはお前の精神に潜り込んで元の姿で対話ができる、それにこれからのお前の進化によっては元の姿に戻れるかもしれない。」

メリオダス「それは、本当か!それはよかったお前たちの元の姿を

一回しか見られないのはさびしいからな！」

俺が喜んでいると、右手にいるドライグが笑い出した。

ドライグ「ははははは、こいつは面白い、自分の精神に入られても動じないとは面白い、これからよろしくな〈相棒〉」

アルビオンが続いて口を開いた。

アルビオン「まさか、私も赤いのと同じ宿主を持つとはな、私もこれから頼む〈メリオダス〉」

二人に対して俺も口を開いた。

メリオダス「おう、これからもよろしくな
〈ドライグ〉〈アルビオン〉」

これから、もう二度目の人生の始まりだ。

「サイドアウト」

プロローグ3

（メリオダスサイド）

よう、メリオダスだ。あれから、一ヶ月が過ぎた今は（ブーステット・ギア）と（ディバイン・ディバイディング）の制御の特訓だ、ああ今言った名前はドライグとアルビオンのことだ。そして俺は今、今後の拠点となる場所を探していた。

メリオダス「さてさてさーて、今後のために拠点を構えたい所なんだが何処に行けばいいのかさっぱりだ。」

ドライグ『その事も何だが、やはりお前は規格外だな。』

メリオダス『ん？何のことだ？』

メリオダスが考えているとアルビオンが答えた。

アルビオン『お前が一ヶ月足らずで禁手「バランス・ブレイカー」に至ったからだ。』

そう、この男は神器「セイクリット・ギア」の中でも最上位に位置する
神滅具「ロンギヌス」の禁じられた力「バランス・ブレイカー」に
ものの一ヶ月もしないうちに至ったからである。

メリオダス『そういえば、あの姿になるにはとのような期間が要るんだ？』

メリオダスの疑問に今度はドライグが口を開いた。

ドライグ『「バランス・ブレイカー」に至るには相当な年月を要するのだが
一番の決め手は劇的な変化が必要だ。』

メリオダス『なんだ、そんなのかんたんじゃねーか。』

ドライグが目を見開いて激しく反発した。

ドライグ『なに!、そんな簡単に至れるわけがｎ『環境の変化』;;;』

メリオダスがドライグを遮っていった言葉に、ドライグはただ唖然としていたメリオダスはドライグたちとの話を中断し、前にある建物を見た。

メリオダス「ここに入れば何か拠点を作る手がかりが見つかるか。」

メリオダスが意気込んで入っていくと其処には。

『おらあああああ!!』

そこには、中にいる人たちが殴り合って馬鹿騒ぎしている光景だった。メリオダスが驚いてその光景を見ていると一人の少女に話しかけられた。

???「ねぇ、そこで何してるの?」

メリオダス「ああ、此処のあたりを拠点しようと思って此処に着たんだそして俺の名前はメリオダスよろしくな。」

少女は笑顔で答えた。

リサーナ「そうなんだ、私の名前はリサーナよろしくね。」

メリオダスはすこしドキっとしたなぜなら、こんなやさしい笑顔をした娘を見たのはエリザベス以来だからだ、この出会いがメリオダスの運命を変えることになるとはまだ知らなかった。

メリオダスとリサーナが会話していると大きな声が聞こえた。

???「なにをしてるかバカども!!」

メリオダスは声のした方を見ていると巨大な足が振ってきた。

???「客人が着ているのに何だお前達は!!馬鹿騒ぎも対外にせい」

メリオダスは戻された足を見てびっくりしたなぜなら、その足の人は自分と同じ位の爺さんだったのだから。

???「それでおぬしは、なぜ此処に来たのじゃ?」

爺さんが聞いてきたので答えた。

メリオダス「ああ、俺は此処に拠点となる場所を探しにきた、それで?此処は何の集まりなんだ?」

爺さんは答えた。

マカロフ「此処は、魔道士ギルド「フェアリーテイル」ワシはこのギルドの「マスター」のマカロフと言う者じゃ」

メリオダス「俺はメリオダスだ、マカロフ此処には拠点となる場所はあるか?俺はこのギルドに入りたい、頼む入れてくれ」

俺の頼みにマカロフはこう答えた。

マカロフ「おお！ええぞ、これからよろしく頼むわい」

こうして俺は魔道士ギルドフェアリーテイルに入った。

（メリオダスサイドアウト）

初仕事

（メリオダスサイド）

よう、メリオダスだ。フェアリーテイルに入って三日ほどたった入ってからの三日間しかたっていないのに俺の生活は充実していたまあ、入って早々ケンカ売られるとは思ってなかったけどなそして今日から、依頼を受けようと思う。

メリオダス「マスター、俺今日から仕事受けても良いか？」

俺がマスターに聞くとこう帰ってきた。

マカロフ「そうか、おぬしにはまだ早いと思うが本人がやってみたいと言うなら仕方あるまいでも、まだモンスター退治など危険な仕事に言ってはならんぞ」

メリオダス「ああ、分かった」

俺がマスターに仕事の許可を貰うと続いてリサーナが続いたマスターに言った。

リサーナ「ねぇ、マスター私も一緒に言って良い？」

マカロフ「ん？なぜじゃ？」

リサーナ「メリオダスが何か分からないことがあったら教えてあげたいのもしもの事があったらメリオダスに守ってもらうからねぇマスターいいでしょ」

マカロフ「むう、メリオダスは最近入ったばかりじゃからのう、少

し不安は残るがいいじゃろう、じゃがメリオダスにしっかり守ってもらうことを条件とする、リサーナできるじゃろ？」

リサーナ「うん、わかったとゆうことでメリオダスよろしくね」

俺はリサーナの返事にこう答えた。

メリオダス「おう、よろしくな」

その後、俺たちは薬草取りの仕事に行った。

（三人称視点）

メリオダスたちは薬草を取るためにマグノリアのはずれにある森に来ていた。

メリオダス「さてさてさーて、お仕事開始といきますか！」

リサーナ「うん！いっしょにがんばろー!!」

一時間後；；；

メリオダス「見つからないなぁ」

さらに一時間後；；；

リサーナ「見つからないねぇ」

さらにもう一時間たった時に事件は起きた。

リサーナ「やっと見つけた、メリオダスー見つけたよー」

リサーナが周りを見ているとモンスターに囲まれていた。

リサーナ「あれ、メリオダスは？って何で私はモンスターたちに囲まれてるのー!!」

リサーナにジリジリと近づいて来るモンスターたちにリサーナは恐怖して泣きかけの状態である男の子の名前を叫ぶ。

リサーナ「いや、いやあああ、メリオダス!!助けて！助けてよおおお!!」

リサーナはもうだめだと思い目を閉じてメリオダスの名前を叫ぶともの凄いオーラを纏った人が飛び出した。

「やめろおおおおお」

「!?」

その人は赤と白をベースとしたよろいを纏った人がリサーナの目の前に立っていた。

???「リサーナ!!無事か!!」

その声を聞いたリサーナは思わず抱きついてしまった。

リサーナ「メリオダス!!」

そう、その声はメリオダスだった。

メリオダス「よかった、リサーナが無事で、さてさてさーて、お前

ら覚悟は出来てるだろうなぁ!!」

メリオダスは少し怒声の混ざった声でそういったその声を聞いたモンスターたちは震え上がって逃げ出してしまった。

リサーナ『かっこいい!!』

リサーナが内心そう思っているとメリオダスに声を掛けられた。

メリオダス「よかった、リサーナが無事で、ん?リサーナが持ってるそれ依頼書の薬草じゃないか?」

リサーナ「;;;」

メリオダス「ん?リサーナどうした?」

リサーナ「え、ああうん大丈夫だよ///////それよりそのよろいどうしたの?」

メリオダス「ああ、このよろいはｎ「それについては俺が説明しよう」

メリオダスがリサーナに説明しようとするととこからともなく声が聞こえた。

メリオダス「いいのか?」

ドライグ「ああ、遅かれ早かればれる事になるんだこの娘にはいいだろう」

リサーナ「え?この声何処から聞こえてくるの?」

メリオダス「ああ、これから説明する」

ドライグ「詳しいをするから相棒に触れてくれ」

リサーナはメリオダスに触れると二人とも森の中で気絶した。

（三人称視点終了）

交わることのない赤と白

（リサーナサイド）

こんにちは、リサーナです。
わたしは今、メリオダスに助けてもらって何処からか声が聞こえた後、メリオダスに触れてたら、いつの間にかあたり一面真っ白い場所にいました

???「よう、白髪の娘よ。」

私は後ろから声が聞こえて後ろに振り返ったら。

ドライグ「よう、俺はドライグ、メリオダスに宿っているものだ。」

アルビオン「おい！赤いの、娘がびっくりしてるぞ、すまない娘よ私はアルビオン、あの赤いのと同じく、メリオダスに宿っているものだ。」

私が振り返ると、其処にはドライグと名乗る、赤いドラゴンとアルビオンと名乗る、白いドラゴンと。

メリオダス「驚かしてごめんな。」

その二体の間から私を助けてくれた、メリオダスが出てきた。

（リサーナサイドアウト）

（三人称視点）

ドライグとアルビオンとメリオダスはリサーナに説明を始めた。

メリオダスは異世界の存在とゆうことを隠して。

リサーナ「ええっと、ドライグとアルビオンは一ヶ月前に自分の世界を飛び出して自分が入るために人を探しているとメリオダスを見つけて入ったら偶然同じ人の体に入っちゃったってこと？」

ドライグ「まあ、そう言う事だな、本当は俺たちは同じ宿主には入れないのだが、今回は世界の壁を越えたために少しその概念が飛んでな。」

アルビオン「まあ、私たちは争いあう存在だったが、この宿主に会って今回は争うことを忘れようというということになった。」

此処でリサーナが疑問を言い放った。

リサーナ「じゃあさ？メリオダスの着ていたよろいは何？あれも、ドライグとアルビオンの力？」

ドライグ「ああ、あれはな、俺たちの力の一端の中でもかなり強力な物なのだが、この男は物の一ヶ月で習得しやがったのさ。」

アルビオン「メリオダス、そのことで話したい事があるのだがいいか？」

メリオダス「ああいいぜここで話しても良いか？」

アルビオン「ああ、丁度この娘にも言いたかったところだ。」

アルビオンが話し始めた。

アルビオン「メリオダス、つい先ほどの戦闘で私たち二天龍の「新

たな可能性」をお前は示した。」

リサーナ「それって何？」

ドライグ「それはな、俺たち二人は交わることの無い存在なのだが、先ほどメリオダスは交わることの無い俺たちを交わらせた、それがさっきアルビオンが言った「新たな可能性」だ。」

メリオダス「へえ、新たな可能性かぁ、凄いなそれは。」

ドライグ「何か興味無さげだな。」

リサーナ「でもそれって凄い事のじゃない。」

アルビオン「まあ、凄いことなのだが、それより現実のほうはいいのか。」

メリリサ「「ああ、忘れてた!!」」

アルビオン「今日はもういい、もう意識を戻してギルドに帰るといい。」

リサーナ「また会えるよね？」

ドライグ「ああ、またメリオダスに触れればまた会えるぞ。」

リサーナ「ああ、良かったじゃあ、またね。」

リサーナとメリオダスは現実に帰っていった。

ドライグ「ああ、ひとつ忘れていた事が有ったが今日の夜にでも言

うか。」

メリオダスとリサーナはギルドに帰ったがマスターに怒られるのであった。

（三人称視点終了）

前世の神器

（メリオダスサイド）

よう、俺はメリオダスだ。
俺は今、自分の精神世界に居る、何かドライグが俺に話したい事があるらしい

ドライグ「よう、相棒お前に聞きたい事がある。」

（メリオダスサイドアウト）

（三人称視点）

ドライグ「よう、相棒お前に聞きたい事がある。」

メリオダス「おう、聞きたい事って何だ？」

ドライグは、メリオダスに言った。

ドライグ「どうも俺のセイクリッド・ギアの中に神に似た、気配を感じるんだが、これはお前の世界で言う、『神器』じゃないのか？」

メリオダスはドライグの言葉に驚愕した。

メリオダス「俺の世界で言う神器、まさか!!『ロスト・ヴェイン』か!!」

ドライグ「もしやと思ったが、本当に相棒の世界のものか。」

アルビオン「メリオダス、お前の世界の神器とは、どんな物なのだ

？」

アルビオンの疑問にメリオダスは答えた。

メリオダス「俺たちの世界の神器は七つしか無かったが、どれも所有者の魔力に同調して力を底上げしてくれるし、神器の力によって特殊な能力を得られた。」

アルビオン「その特殊な能力とは何だ？」

アルビオンはメリオダスの神器の特殊能力について聞いた。

メリオダス「俺の神器の能力は、分身を作ることだ。」

ドラアル「「分身？」」

ドライグとアルビオンはそれだけの事かと思うと次のメリオダスの言葉に耳を疑った。

メリオダス「ただの分身じゃないぞ、俺本体の力は少し失われるが、俺の能力、魔力を持った実体の在る分身だ。」

ドラアル「「何だと!!」」

ドライグとアルビオンは恐怖した、こんな恐ろしい存在が増えることに。

ドライグ『此れほどの力を持った奴がさらに増えるだと!!』

アルビオン『さらにメリオダスは魔力を持った攻撃を倍以上に跳ね返すこともできたはずだ!!』

二人は声を揃えて心の中でこう叫んだ。

ドラアル『『何処まで規格外なんだ「相棒」「メリオダス」は!!。』』

メリオダス「ん？何か言ったか？」

ドラアル「「いいや、何でもない。」」

ドライグとアルビオンはそういった。

メリオダス「それで、ロストヴェインは現実のほうで使えるのか？」

ドライグ「ああ、使えるぞ明日の朝、俺の中から抜き出す。」

メリオダス「ああ、分かった。」

メリオダスはそれを聞いてから眠った。

（三人称視点終了）

（メリオダスサイド）

次の日の朝、俺はドライグに言われたとおり、ロストヴェインを出す準備をしていた。

メリオダス「こい！赤龍帝の籠手!!」

俺は赤龍帝の籠手を出した。

メリオダス「ドライグ、ロストヴェインはどうやって出すんだ？」

ドライグ「ああ、お前が念じればお前の神器も答えてくれる。」

俺はドライグに言われ念じた。

メリオダス「来い！ロストヴェイン!!」

俺が念じると、赤龍帝の籠手からロストヴェインが出てきた。

メリオダス「よう、久しぶりだなロストヴェイン。」

俺はロストヴェインに話し掛けるが、返事は来なかった。

メリオダス「あれ？何で声が聞こえないんだ？」

アルビオン「お前の世界の神器はしゃべるのか？」

そうだ、俺の世界の神器はしゃべらないんだ。

メリオダス「そうだった、俺の世界の神器はしゃべらないんだった。」

俺は、恥ずかしい思いを胸にしまい、ギルドに向かった。

ＶＳエルザ

（メリオダスサイド）

よう、俺はメリオダスだ。
俺は今何をしているのかと言うと。

???「さあ、戦おう。」

リサーナ「メリオダスー、がんばってー。」

何故か、ギルドメンバーに囲まれて剣の勝負をすることになっている。

これは、数分前のことだった。

（三人称視点）

メリオダス「よう、みんなおはよう。」

「おう、おはよう。」
「メリオダス、おはよう。」
「おはよう、メリオダス。」

メリオダスがみんなに挨拶しているとマカロフが来た。

マカロフ「おお、メリオダス、おはよう。」

メリオダス「よう、マスターおはよう。」

此処でマカロフがある事に気づいた。

マカロフ「ん？メリオダス、その背中に背負っている剣は何じゃ？」

メリオダス「ん？ああこれか、これはおれｎ「おはよーメリオダス!!」ぐへぇ。」

メリオダスがマカロフと話していると、リサーナがメリオダスの背中に抱きついていた。

メリオダス「あぶないだろ、リサーナ。」

リサーナ「えへへ、ごめんなさい。」

メリオダスが注意口調で言うと、リサーナは笑顔で答えていた。

メリオダス「それで、話の続きだがマスター,,,てなにニヤニヤしてるんだ？」

マカロフ「いいや、なにリサーナも積極的になったと思ってのう。」

リサーナ「／／／／」

メリオダス「？」

マカロフに言われてリサーナは赤くなり、メリオダスは何がなんだか分からないでいた。

メリオダス「で、マスター話を戻すが、これは俺の相棒だ。」

ここで、リサーナがメリオダスに耳打ちする。

リサーナ「(あれ?メリオダスの相棒って、ドライグとアルビオンじゃないの?)」

メリオダス「(ああ、これは、ドライグとアルビオンの前に持っていた相棒だ、ドライグとアルビオンが宿ってから見当たらなかったが、どうやら、ドライグが持っていたみたいなんだ。)」

リサーナ「(そうだったんだ。)」

???「ちょっといいか?」

メリオダスとリサーナが振り返ると其処には。

リサーナ「エルザ!!」

リサーナが驚いた口調で言う。

エルザ「ああ、すまないがちょっといいか。」

メリオダス「ああ、いいぞ。」

エルザ「お前は剣を使うのか?なら、一回立ち会いたいのだがいいか?」

メリオダス「ああ、いいぜ。」

メリオダスがそう答えると、周りが一気に騒がしくなった。

「エルザとメリオダスが立ち会う!」

「メリオダス、正気か!」

「また、犠牲者が出るのか！」

エルザ「じゃあ、移動しようか。」

メリオダス「ああ、そうだな。」

そして今に至る。

（三人称視点終了）

（メリオダスサイド）

メリオダス「何でみんな、ついてきたんだ？」

俺が疑問を言うとみんなは。

「「メリオダスがエルザの犠牲者になったら運ぶため。」」

メリオダス「そんなにこの娘は強いのか？」

エルザ「この娘はやめろ、エルザと呼べ。」

メリオダス「ああ分かったエルザ、さあはじめようか」

マカロフ「これから、メリオダスとエルザの決闘を始める、両者、前へ。」

マスターに言われて前に行く。

マカロフ「それじゃあ、始め!!」

マスターの合図で俺とエルザは地を蹴った。

エルザの罪

（リサーナサイド）

こんにちは、リサーナです。
今はメリオダスとエルザの決闘を見にきたんだけど。

エルザ「はあああああ。」

メリオダス「うーーん、軽いなぁ。」

メリオダスがあのエルザを押していた。

（リサーナサイドアウト）

（メリオダスサイド）

よう、メリオダスだ。
今はエルザと決闘しているのだが、うーーん何か物足りない、エルザの剣にも迷いがあるし、どうしたものか。

メリオダス「エルザ、ちょっとストップ。」

エルザ「ん？分かった」

俺の声によりエルザは足を止めた。

エルザ「どうした、いきなり止めるだなんて。」

メリオダス「なぁエルザ、お前は何に迷っているんだ。」

エルザ「な！」

俺がエルザに言うとエルザは剣を握る力を強めた。

エルザ「何故そのことを知っている！」

俺はエルザの言葉の後一呼吸置いてこう言い放った。

メリオダス「何故って、お前の剣が迷いそのものだからだ。」

俺はそう言い、その場を立ち去ろうとすると。

エルザ「待て、何処に行くつもりだ！」

メリオダス「何処ってギルドだが？」

エルザ「まだ決闘は終わってないぞ。」

メリオダス「だって、今のお前と戦っても何の解決にもならないし、その問題は自分で始末を着けるんだろ？」

メリオダス「それと、今のお前の勝機は０だ。」

俺はエルザに言い放ち、今度こそその場を立ち去ろうとする。

エルザ「待て、この臆病者！」

俺はエルザの言葉に少し声を強めて言った。

メリオダス「じゃあ、何でお前は今向き合わなければいけない現実から逃げてんだ！」

エルザ「!!」

メリオダス「お前の剣から伝わってくる迷いは現実から逃げているって言う物だった。」

メリオダス「臆病者それはエルザ、お前にこそ似合う言葉じゃないのか？」

エルザ「き、貴様あああああ!!」

エルザが俺に切りかかってくるが俺はエルザの剣を弾き飛ばして、俺は倒れているエルザの首筋に剣を向ける。

メリオダス「それは、今向き合うべき現実から逃げていること、それがお前の罪だぜ!!」

俺はエルザにそう言い放ち、その場から立ち去る。

マカロフ「し、勝者、メリオダス!!」

後ろからマスターのコールが聞こえた。

（メリオダスサイドアウト）

（エルザサイド）

私は悩み、迷っていた。

ジェラールを助けて、楽園の塔から逃げ出して終わりだと思っていた。だが、それは違った、ジェラールはゼレフを復活させるなどと言い出し、脱出するはずだったみんなを使って塔を再建すると言った。私は結局、自分だけ逃げ出して、ここで楽しく生活している。私は今、

直面するべき問題から逃げ出していただけだった、私は、ただの臆病者なのだ。

???「おい、エルザ。」

エルザ「ナツか。」

私はナツにこう言われた。

ナツ「何時までも、落ち込んでんじゃねぇよ、エルザらしくもねぇ!!」

私はナツに言い返した。

エルザ「私は、メリオダスに言われた通りの臆病者なんだぞ!!」

ナツ「だから、自分ひとりで抱え込むなつってんだろーが!!」

エルザ「!!」

私は、いつの間にかナツに説教されていた。

ナツ「あいつが、お前に何を言おうが関係ねぇ!!エルザ!お前はギルドの仲間じゃねぇか!!」

ナツ「エルザ!お前に悩みがあるなら言えよ!ギルドの仲間は家族だ!家族のお前が一人で抱え込んでどうすんだ!」

私は片目から涙を流しながらこういった。

エルザ「ナツぅ、みんなぁ、ありがとう。」

私はメリオダスに教えてもらった、迷いのことと、家族のことを。

（エルザサイドアウト）

ミラの説得

（メリオダスサイド）

よう、メリオダスだ。
エルザとの決闘から三年たった、あの後エルザはみんなに自分の過去をみんなに明かした、俺もエルザの過去には驚いた、そんな場所があったこともだが、エルザの言うジェラールって言うやつのことだ、俺はそいつが誰かに洗脳されているにしか思えなかった、その後はエルザも明るくなり、笑顔が増えた、それとハッピーという猫が生まれた、なぜか羽が生えていたが、あとなぜかナツから頻繁にケンカを売られるようになったなそれはいいとして、今ギルドに居るのだが。

リサーナ「だーかーら、今日はメリオダスと過ごすって言ってるじゃん！」

ミラ「何でだよ、いつもクリスマスは家族で過ごすって決まってるだろ！」

なぜかミラとリサーナが言い合っていた。

（メリオダスサイドアウト）

（リサーナサイド）

はい、リサーナです。
私はいま、説得をしています。

ミラ「何で、クリスマスに出かけるんだよ!!」

そう、クリスマスをメリオダスと一緒に過ごすため、そして自分の

思いを伝えるため。

リサーナ「だーかーら、メリオダスと一緒に過ごすためだって言ってるじゃん!!」

ミラ「何で、あいつと過ごすんだよ!」

リサーナ「それは;; ちょっとミラ姉ぇこっちきて!」

ミラ「わ、なんだよリサーナ。」

私はミラ姉ぇをつれて、ギルドを一度出た。

ミラ「で? 何であいつと過ごすんだ?」

ミラ姉ぇが私に聞いてきた。

リサーナ「それはね、メリオダスに自分の思いを伝えるためだよ。」

ミラ「なぁ、なんであいつなんだ?」

私はミラ姉ぇの疑問に笑顔で答えた。

リサーナ「私がメリオダスの最初の依頼についてった事があったでしょ。」

リサーナ「私さ、あの時メリオダスとはぐれてモンスターに囲まれた事があったんだよ。」

リサーナ「そのとき、メリオダスが助けてくれたんだ。」

リサーナ「理由はそれだけじゃないよ、他にもいろいろと助けてもらったこともあったし、それに何より、私はメリオダスの笑顔に惹かれたんだ。」

リサーナ「だから今日だけは絶対にミラ姉ぇを納得させる。」

私がミラ姉ぇに言うとミラ姉ぇは。

ミラ「はあーー、分かったよ！」

リサーナ「え？」

ミラ「だから、今日だけは許してやるよ、エルフマンからは私が伝えておくから行ってきな。」

私は喜びミラ姉ぇに抱きついた。

リサーナ「ありがとー、ミラ姉ぇーー。」

ミラ「わ／／こら抱きつくな／／」

こうして私はミラ姉ぇを説得した、そして。

リサーナ「メリオダス今日は約束どうり二人で過ごそう。」

メリオダス「そういえば、何で今日なんだ？」

リサーナ「ふふ、それは後でのお楽しみです。」

（リサーナサイドアウト）

リサーナの思い

（リサーナサイド）

こんにちは、リサーナです。
ミラ姉ぇを説得して今メリオダスと待ち合わせしています。

メリオダス「よう、リサーナ。」

リサーナ「あ、メリオダス。」

リサーナ「じゃあ、行こっか。」

メリオダス「わ、ちょっと待てよ。」

私はメリオダスの手をとって走り出した。

（リサーナサイドアウト）

（三人称視点）

メリオダスとリサーナは町にいた。

リサーナ「それじゃあ、あそこに行こ！」

リサーナは行く方向に指をさして言った。

そして今、リサーナたちはケーキ屋にいた。

店員「いらっしゃいませ、ただいま当店ではクリスマス限定のカップルサービスを提供しておりますが、いかがなさいますか？」

メリオダス「いや、俺たちは「それでお願いします」ちょ、リサーナ。」

店員「はい！かしこまりました！カップルサービスですね。しばらくお待ちください。」

メリオダス「リサーナ、お前この事知っててこの店は行ったろ。」

リサーナ「うん、でもクリスマスだし、このくらいいいでしょ！」

メリオダス「まあ、良いが、でもギルドのみんなに知られても俺は知らないぞ。」

リサーナ「別にいいもん見られても。」

メリオダス「まあ、良いか今日ぐらい。」

数分後、美味しそうなケーキを持った店員が来た。

店員「お待ちどうさまです！カップルケーキでございます！」

リサーナ「わぁ、美味しそう！」

店員「では、カップルケーキのお客様にはお互い食べさせ合いながら写真を撮らせていただきます。」

「「え」」

メリオダスとリサーナは店員の言葉に驚いた。

リサーナ「え、食べさせあいながら写真ですか？」

店員「はい、そういうサービスですが？ご存知じゃなかったのですか？」

リサーナ「はい；；／／」

メリオダス「もう頼んじゃったものは仕方が無いし、食べるか。」

リサーナ「うん；；／／」

メリオダスは、フォークにケーキを刺しリサーナの口へ持っていった。

メリオダス「はい、あーん。」

リサーナ「あ、あーん／／」

『カシャッ！』

ケーキがリサーナの口へと持っていかれ、口に入ると横にいた店員がカメラのシャッターボタンを押して写真を撮った。

リサーナは一瞬の事だったが顔が真っ赤になるほど赤かった。

メリオダス「リサーナ、大丈夫か？」

メリオダスが、リサーナにたずねるとリサーナは。

リサーナ「う、うん／／大丈夫だよ／／／」

リサーナの顔は変わらず赤かった。

店員「さあ、次は彼氏さんの番ですよ!!」

店員さんはメリオダスに言った。

メリオダス「わかった、ほらリサーナ、ケーキを。」

リサーナ「メリオダスは、恥ずかしくないの？」

リサーナの問いにメリオダスはこう言った。

メリオダス「馬鹿／／恥ずかしいに決まってんだろ／／」

リサーナ「そっか!!」

リサーナは笑顔で言った。

リサーナ「はい！メリオダス、あーん。」

メリオダス「あ／あーん／／」

『カシャッ！』

店員「はい、ありがとうございました、ではごゆっくり♪」

店員さんは笑顔で言った。

リサーナ「じゃあ／／残り食べよっか／／」

メリオダス「あ、ああ／／」

リサーナとメリオダスは残りのケーキを食べ切り、会計に言った。

店員「はい、ご来店ありがとうございました、これはさっきの写真です。」

店員の出したのはリサーナとメリオダスがケーキを食べさせあってる写真だった。

リサーナ「／／ありがとうございます／／」

リサーナとメリオダスは、ケーキ屋を出た。

リサーナとメリオダスは誰もいない広場にいた。

メリオダス「で、リサーナ俺を今日誘ったのは何でだ？」

メリオダスはリサーナに聞くとリサーナは。

リサーナ「うん、今日誘った理由は。」

リサーナ「自分の答えを聞いてもらうためだよ。」

メリオダス「答え？」

リサーナ「3年前のメリオダスに助けてもらって、メリオダスたちの秘密を知ったあの日から、メリオダス、貴方の事が好きになったの。」

メリオダス「え」

リサーナ「だから、貴方の事が好きなの。」

メリオダスは固まった、まさか自分がこの世界に来て、告白されるとは思ってなかった。

リサーナ「だから、貴方の答えを聞かせてほしいの。」

メリオダス「俺の答えは。」

メリオダスの答えはこう言った。

メリオダス「俺もお前が好きだ、これが俺の答えだ。」

リサーナ「メリオダスーーー。」

リサーナがメリオダスに抱きついた。

リサーナ「ずっと、ずっと不安だった、貴方に受け入れてもらえなかったら、貴方に突き放されたらと思ったらと思うと不安で不安しょうがなかった。」

リサーナは泣いた、涙を流して泣いた。

数分後、泣き止んだリサーナがメリオダスに言った。

リサーナ「ごめんね／／メリオダス。」

メリオダス「まぁ、良いって、ずっと不安だったんだろ。」

リサーナ「で、でも／／」

リサーナは恥ずかしがっていても、メリオダスの手を離すことは無かった。

（三人称視点終了）

リサーナの死

（メリオダスサイド）

よう、メリオダスだ。
リサーナの告白から半年たった。
この半年の間はすごく幸せに過ごしていた、リサーナとデートをしてギルドの連中に見つかり、みんなに事情を話したら、ギルド中大騒ぎになったり。
ミラからは「リサーナを泣かしたらぶっ殺す!!」なんてことを言われ。
エルフマンからは、「メリオダス、男ならリサーナを泣かすなよ。」と言われた。
マスターからは「リサーナ、よく自分から告白したのぉ。」言われリサーナが真っ赤になっていたことを今でも覚えている。
そして俺もエリザベス見たくもうリサーナを失わないと心に決めた。

メリオダス「マスター、この依頼を頼む。」

マカロフ「おお、いいぞ行って来い。」

メリオダス「ああ、行ってくる。」

俺が依頼を受け、依頼のある町に向かおうとギルドを出ようとしたら、リサーナが来た。

リサーナ「メリオダス！今から一緒に仕事行こうよ。」

メリオダス「悪いな、リサーナもう受けちまった。」

リサーナ「えー、メリオダス受けちゃったのー。」

メリオダス「ごめんな、だけど帰ってきたらまたどっかに行くからそれで許してくれ。」

リサーナ「え！本当に、分かった！じゃあまってるね。」

ミラ「おーい、リサーナー、いっしょに仕事いこーぜー。」

リサーナ「あ、ミラ姉ぇが呼んでる、じゃあねメリオダス仕事がんばってね！」

メリオダス「ああ！そっちもがんばれよー。」

リサーナ「うん！わかったー。」

メリオダス「さあ、俺も仕事がんばるか！」

俺はまだ知らなかった、これがリサーナとの最後の会話であることを。

依頼の内容は、ハコベ山で【ブリザードバーン】というワイバーンが大量発生し、その退治が今回の依頼だ。

メリオダス「今回の仕事は少しきつそうだなドライグ。」

ドライグ「ああそうだな、今回は俺たちの力を使えよメリオダス、最近は暴れられなくて暇なんだ。」

アルビオン「ああそうだな赤いの、メリオダス少しは俺たちを使っ

てくれ、そうじゃなければ、俺たちが転生してきた意味が無い。」

そういえば、最近暴れさせてないな、これを気にいっぱい暴れさせるか。

メリオダス「そうだなぁ、よし、今回はお前たちに頼るか。」

ドライグ「わかった、それとお出ましだぞ。」

俺が見ると目の前には依頼内容のブリザードバーンたちがいた。

ブリザード「ぐおおおおおおお。」

メリオダス「やる気満々みたいだな、じゃあこっちも。」

俺はロストヴェインで自分の分身を1体作り出した。

「「さあ、やるか禁　手《バランス・ブレイク》!!」」

『Ｗｅｌｓｈ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ!!!!』

『Ｖａｎｉｓｈｉｎｇ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂａｌａｎｃｅ　Ｂｒｅａｋｅｒ!!!!』

俺が言うと本体と分身に赤い鎧と白い鎧が纏われた。

（メリオダスサイドアウト）

（三人称視点）

メリオダス「「さあ、暴れるか!!」」

二人のメリオダスたちは掛け声と一緒にワイバーンに向かっていた。

ブリザード「ぐおおおおお。」

メリオダス「ほい!!」

ワイバーンがメリオダス「本体、ドライグ」に向かって飛んできた、それをメリオダスは殴り飛ばす。

ブリザード「「「ぐおおおおお!」」」

次にメリオダス「分身、アルビオン」に４体向かってきた。

メリオダス「ほい!ほい!ほい!ほい!」

『Ｄｉｖｉｄｅ!』

メリオダス「分身」が４体のワイバーンを殴り飛ばすと「ディバイン・ディバイディング」の能力でワイバーンの力を半減させ、動きを止めていく。

『Ｂｏｏｓｔ!』

メリオダス「本体」は「ブーステット・ギア」の能力で倍化させ、ロストヴェインに黒炎を纏わせ。

メリオダス「『神千切り』」　『Ｔｒａｎｓｆｅｒ!』

メリオダス「本体」は黒炎に力を『譲渡』し、攻撃を放った。

ブリザード「「「「ぐおおおおおお!?」」」」

ワイバーンたちが何が起きたかわからずに絶命していった。

メリオダス「「これで仕事は終わりっとさっさと報告終わらせてギルドに帰るか。」

メリオダスはブリザードバーンたちを焼き払い、早々に報告して帰っていった。

其処に絶望があるとも知らずに。

（三人称視点終了）

（メリオダスサイド）

メリオダス「ただいま、マスター依頼完了だぜ！ってみんなどうした？」

俺がギルドに帰るとみんな静かに俺のほうを見ていた。

マカロフ「、、、いいかメリオダス、落ち着いて聴け。」

マカロフ「、、、

、、、、、、リサーナが死んだ。」

メリオダス「、、、は？」

（メリオダスサイドアウト）

暴走そして失踪

（メリオダスサイド）

メリオダス「、、、は？」

リサーナが、、、死んだ？

メリオダス「おいおい、冗談はやめてくれよマスター、おいリサーナいるんだろ？返事してくれよ。」

マカロフ「メリオダス、辛い事じゃがこれは事実だ。」

メリオダス「なぁ！マスター、嘘だって言ってくれよ！みんなも嘘だって言ってくれよ！なぁ、みんなぁ!!」

「「「、、、」」」

リサーナが死んだなんて嘘だ！そうだミラに聞いてみよう。

メリオダス「なぁ！ミラ！エルフマン！何とか行ってくれよ!!」

ミラ「、、、、ごめん。」

エルフマン「、、、、すまない。」

メリオダス「おい、何だよそれ!!」

俺は、ミラとエルフマンの胸倉を掴み挙げた。

「「グッ。」」

マカロフ「!!何をやっておるメリオダス!!みんなメリオダスを止めるぞ!!」

みんなが俺を止めた、そして、思い知った、此処が俺のもといた世界とは違ってクソ親父の呪いは無い、だからエリザベスのように生き返る事が無い。

俺がそばに居たらこうならなかった、俺がリサーナたちと一緒に仕事に行っていればこうはならなかった、この世界に来て俺はまた失った、自分が守らなければいけない最も大切な命を失った、俺がしっかりしていれば、俺がしっかり守れていれば、俺は失った。

失ったうしなったうしなったうしなったうシなッタウシナッタ。

ソウカ、オレハマタウシナッタノカ、モウ、ウシナワナイッテチカッタノニ。

ドライグ『相棒!!相棒!!』

アルビオン『メリオダス!!自我を持て!!』

俺の視界は闇に染まった。

（メリオダスサイドアウト）

（三人称視点）

ギルドのみんながメリオダスを止めてから数分がたった、ミラとエルフマンはメリオダスの目の前で蹲りながら泣き出していた。

マカロフがミラをなだめながらメリオダスに言う。

マカロフ「メリオダス、依頼にはたまに死と隣り合わせの依頼もあるということじゃ。」

だが、マカロフの言葉にメリオダスは答えない。

マカロフ「ぬ？メリオダス、聞いておるの、、、か。」

マカロフがメリオダスのほうを見るとメリオダスから黒い魔力が漏れており、ギルド中に漂っていた。

マカロフ「ぬ!!なんて魔力じゃ!!メリオダス!!自我を持て!!」

マカロフがメリオダスに声を掛けるが返事がない。

ミラ「どうなってるんだ!!これ!!」

エルフマン「わからねぇよ姉ちゃん!!」

ミラとエルフマンがわけもわからず混乱していると何処からか声が聞こえた。

???『マスターマカロフ、ならびにフェアリーテイルのギルドメンバー。』

マカロフ「!!何じゃこの声は!!」

???『死にたくなければ、今すぐに此処を離れろ。』

ギルドのみんなが混乱しているとさっきとは違う声が聞こえた。

???『そこの二人の魔道士。』

「!?」

ミラとエルフマンの二人が動揺した、その後さっき聞こえた声二つの声が同時にこだました。

???『『お前らは呼び覚ましてはいけないものを呼び起こした!!』』

それと同時にメリオダスから白銀の羽と赤色の籠手が現れたと同時にメリオダスからとてつもない魔力の波動が発せられた。

マカロフ「一体メリオダスに何が起きたというのじゃ!!」

マカロフの声はかき消されメリオダスとなぞの二つの声が同時に言葉を発した。

『『『《我ら、目覚めるは――――》』』』

メリオダスの体に赤と白が交わった鎧が形成された。

『『『《神より新たなる闇を与えられし二天龍なり――――》』』』

メリオダスの鎧は形を変えている。

『『《愛を失い、心は闇へ――――》』』

メリオダスの体は肥大化して白銀の大きな翼と強靭な赤い爪をもつ龍のような姿になっていく。

『『」《我ら、二天龍の化身となりて――――》』』

龍となったメリオダスを最初に発していた黒い魔力が包み込んだ。

『『《汝を黒き絶望の煉獄へと誘おう――――》』』

メリオダスから出ていた魔力は球体となってギルドの屋根を吹き飛ばしながら上空へと飛んでいき。

『『《魔神の覇龍「ジャガーノート・デモニック・ドライブ」》』』

「ＪｕｇｇｅｒｎｕｔｏＤｅｍｏｎｉｃＤｒｉｖｅ！！！！！」

やがて、メリオダスを包んでいた魔力が砕け散ったそこに居たのは禍々しい黒い魔力を放っている龍だった。

マカロフ「な、何じゃあれは。」

マカロフが言葉を漏らした、普段のメリオダスがあんな禍々しい姿をしているからだ。

メリオダス「ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ!!!」

メリオダスはそのままどこかへ飛び去ってしまった。

マカロフたちはメリオダスを追えず後悔が立ち込めていた。

ｘ７８２年フェアリーテイルメリオダス失踪。

再開

（レビィサイド）

はい、レビィです。

私たちのギルドフェアリーテイルは、とある魔道士ギルドと中が悪いの、そのギルドの名前はファントムロード、そしてそのギルドが夜中にギルドを破壊した、だけど、魔道士ギルドの間では戦うことは禁止されてるから攻めるに攻めれない、だから今は何もできない、そして今日ギルドから帰る途中にファントムの「鉄龍のガジル」に襲われたの。

ガジル「オラァッ！」

「うあああああ!!」

レビィ「ジェット！ドロイ！」

そして今、ジェットとドロイがやられて私一人になってしまった。

ガジル「さあ、後はてめぇだけだ！」

そう言ってガジルが私に近づいてくる。

レビィ「やめて!!こないでぇ！」

私が言ってもガジルは問答無用で近づいてくる。

ガジル「これで終わりだ、せいぜい戦争の火種になってくれ。」

私に鉄になった腕が振り下ろされる。

レビィ『やばい、誰か助けて!!』

だが、ガジルの攻撃が私にあたることはなかった。

ガジル「てめぇ！何者だ！」

ガジルが後退し怒鳴っている。

???「なぁに、こいつの《元》仲間さ。」

私の目の前にいた人はフードを深くかぶった青年だった。

レビィ『え、この人誰？』

私が突然に現れた青年に困惑していると青年が私に。

???「あー確か、レビィだっけか？そこの二人連れてマスターの、マスターマカロフのところまで走れ、此処はオレが止めとくから。」

レビィ「な、何言ってんの!!こんな奴一人でなんてｍ「大丈夫大丈夫、こんな奴には負けないから。」で、でも。」

???「とりあえず、今はオレを信じろ。」

レビィ「わ、わかった、でも、無理はしないでよ！」

???「早く行け。」

私はマスターの元へジェットとドロイを連れて走った。

（レビィサイドアウト）

（マカロフサイド）

ワシは考えていた、なぜファントムが今攻めてきたかを、ファントムは長年いがみ合ってきた中、いずれこうなると睨んでいたがどうしてこの時期なのかと。

ワシが考えているとワシの元にレビィが駆け込んできた、傷ついたジェットとドロイを連れて。

マカロフ「どうしたのじゃ！レビィ!!」

レビィ「私たちがジェットとドロイと帰ってるときにガジルが襲ってきての!!」

マカロフ「何じゃと!!そのガジルはどうした!!」

レビィ「それは、私のことを《元》仲間って言ってきた人が助けてくれての！早く助けに行かなきゃ!!」

元仲間、最近フェアリーテイルを抜けた奴などおらぬはずじゃが。

マカロフ「レビィワシをそこへ案内してはくれぬか？」

レビィ「うん!!、わかった。」

ワシたちはすぐにその場所へ向かったが、誰もおらんかった、でもファントムには戦争を仕掛けることは決めた。

マカロフ「待っておれよ!!ファントムロード!!」

（マカロフサイドアウト）

（三人称視点）

マカロフがギルドメンバーをギルド前に集めた。

マカロフ「昨日の夜、ファントムロードのガジルがレビィたちを襲撃した。」

「「「「「!!」」」」」

みんなは驚き、そして黙りこんだ。

マカロフ「辛うじてレビィは襲撃から逃れたが、ジェットとドロイが傷を負った。」

マカロフ「ボロ酒場までは我慢できたのじゃがなぁ、ガキの血を見て黙ってる親は居ねんだよ!!」

マカロフは持っていた杖を握りつぶした。

マカロフ「戦争じゃあ!!!。」

マカロフの宣言によりギルドメンバー全員の怒りが爆発した。

ナツ「ファントムに戦争じゃあーーーー!!!」

「「「「「おおおおおおおおおおお!!」」」」」

みんながファントムのある「オークの町」に着くと異様な光景が広

がっていた。

マカロフ「な、なんじゃ、これは。」

その広がっていた光景は、ファントムのあったギルドは焼け焦げ、中に居たファントムのギルドメンバーも焼け焦げ、残っているのは、ガジルともう一人の魔道士だけだった。

ガジル「ば、化け物。」

???「ああ、化け物で結構だ。」

アリア「ああ、かな、しい。」

???「お前らの罪は、『リサーナ』のいた思い出のギルドをつぶそうとしたことだ。」

フェアリーテイルのみんなは青年の言った、リサーナに反応していた。

マカロフ「まさか、おぬしは。」

マカロフの言葉に青年が反応した。

???「ああ、マスター久しぶり。」

青年がフードを挙げた、そこには。

額に黒い太陽の刺青があった

メリオダスがいた。

（三人称視点終了）

ギルドへの決別

（三人称視点）

ファントムに報復に来たフェアリーテイルだが、そこにいたのは焼き焦げているファントムロードのギルドと焼き焦げたファントムロードのギルドメンバー、そして『かつて』フェアリーテイルにいたころとはかけ離れた様子のメリオダスだった。

マカロフ「メ、メリオダス!、生きておったのか!!」

マカロフの言った言葉にメリオダスが反応した。

メリオダス「おいおいマスターそれはねぇだろ、自分たちのギルド崩壊させた張本人がそう簡単に死ぬと思ったのか。」

メリオダスの言葉の後にエルザが答えた。

エルザ「メリオダス!!お前が何故此処にいるかは知らんが、ギルドに戻って来い!!」

メリオダス「エルザ、オレはギルドに戻ることはない。」

エルザ「何故だ!!」

メリオダス「リサーナが死んだ、オレが愛した女が、俺の知らないところで死んだ。」

メリオダス「俺はあいつの笑顔が見れればそれで良かった、だが、リサーナが死んだ今、オレがギルドにいてリサーナのことを忘れてのうのうと笑い、喜び、幸せになる、そんな事が許されると思っているの

か？」

メリオダス「俺はそんなことをして良い権利でもあるのか？オレはあの時暴走してギルドを破壊し、いまさらあのようなリサーナと一緒に笑っていたころに戻れると思っているのか？」

メリオダスの発言に誰も言葉を発することができなかった、一呼吸置きメリオダスが言葉を発した。

メリオダス「だからオレはギルドに戻ることはない、俺は影でみんなの、リサーナがいたギルドを守り続ける。」

メリオダスの言葉に一人反論するものがいた。

ナツ「ふざけんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!」

それはナツだった。

ナツ「何ふざけたこと抜かしてんだよ!!メリオダス!!」

ナツ「そんなことしてリサーナが本気で喜ぶと思ってんのかよ!!」

ナツの言葉にメリオダスはこう返す。

メリオダス「そうだ、これはオレの自己満足だ。」

ナツはメリオダスの言葉を聞き終わった後、メリオダスに飛び掛る。

ナツ「お前はリサーナの喜ぶことをするべきじゃねぇのかよ!!」

ナツは握っている拳に炎を纏わせる。

ナツ「火竜の鉄拳!!」

ナツの炎を纏った拳はメリオダスに入ったかと思われたが。

メリオダス「ナツ、この程度か？お前はこの二年間何をしていた？」

ナツ「!?」

ナツの拳は人差し指一本で止められていた。

メリオダス「お返しだ、確かこうだったな。」

メリオダスはナツがやったように拳に黒い炎を纏い殴りつけた。

メリオダス「魔神王の火炎拳」

メリオダスの放った拳はナツを遠くまで飛ばした。

「「「「「ナツ!!」」」」」

メリオダス「どうだ、お前らじゃ到底かなわない。」

メリオダスの言葉にギルドのみんなは息を呑む、そこへ。

???「おやおや、これは仲間割れですか。」

メリオダス「誰だ。」

メリオダスがゆっくり振り向くとそこには。

???「これは失礼しました、私はこの事件を起こした張本人。」

ジョゼ「ファントムロードのマスター、マスタージョゼでございます。」

メリオダスが動く理由を作った奴だった。

（三人称視点終了）

格の違い

（メリオダスサイド）

よう、メリオダスだ。
俺はみんなと再会し、俺はギルドに帰らないことを言った後、ナツが殴りかかってきたが軽く殴り飛ばした、そして今。

ジョゼ「ファントムロードのマスター、マスタージョゼでございます。」

俺の今回の目的が出てきた。

（メリオダスサイドアウト）

（三人称視点）

マスタージョゼが自己紹介した後、マカロフが口を開いた。

マカロフ「ジョゼェ!!あれは何のまねじゃ！おう!!」

ジョゼ「これはこれはマカロフさん、六年前の定例会以来じゃないですか、あの時は参りましたねぇ、ちょっとお酒が入っていたもので。」

ジョゼの言葉を聞き、マカロフがジョゼに殴りかかろうとしたが、メリオダスに止められた。

マカロフ「メリオダス!!何故止める!!」

メリオダス「落ち着けよマスター、今のそいつを殴っても無駄だ、

なぁ、ファントムロードのマスターの思念体さん。」

マカロフ「思念体じゃと!!」

メリオダスの言葉にマカロフが驚く、そしてジョゼが口を開いた。

ジョゼ「おやおや、バレちゃいましたか、まったく貴方は規格外なクソガキですねぇ。」

メリオダスがジョゼの言葉に呆れ、笑い出す。

メリオダス「はっはっは、こんなお粗末なもの見せられて規格外なんて言われるのも変な話だぜ。」

ジョゼ「これがお粗末だと!!、嘆くのもいい加減にしろよクソガキ!!」

激昂するジョゼにメリオダスが言い放った。

メリオダス「魔法の発動地点がわかることをお粗末といって何が悪いんだ、丁度ナツが殴りかかってくる前に発動したから発動地点にナツを殴り飛ばしちまったよ。」

メリオダスの言葉にジョゼが驚く。

ジョゼ「魔法の発動地点?バカなそんなもの分かるわけない!!」

メリオダス「じゃあ当ててやろうか?此処から少し北西側に言った岩山辺りにおまえがいるだろ?」

メリオダスの言葉に思念体のジョゼが冷や汗をかく。

ジョゼ「な、なぜ此処の場所が。」

メリオダス「もうすぐナツがくると思うぜ、ほら来た。」

ジョゼの思念体から声が聞こえる

「ルーシィーーーーーーーー。」

エルザ「ナツの声だ!!」

グレイ「何処に居やがる!!ナツ!!」

ジョゼ「こ、こんな事が有り得るのか!!」

メリオダスがジョゼに言い放つ。

メリオダス「マスタージョゼ。」

ジョゼ「!!」

メリオダス「次、俺の居たギルドを攻めてみろよ、次は必ず殺す、今回で格の違いが分かったろ?もし攻めてくるのなら煉獄砕波『アビスブレイク』でも持って来い、いつでもぶっ壊してやる。」

メリオダスは、ジョゼに言い放ち、転がっていたガジルとアリアを本部の方へ投げ飛ばし、姿を消した。

（三人称視点終了）

真実への一歩

（ナツサイド）

よう、ナツだ!!

俺はさっき、メリオダスに殴り飛ばされたんだか、何かそのときに。

ナツ「メリオダスの奴、『お前を今の仲間のところに殴り飛ばす、回収したらすぐ逃げろ。』って何だよ。」

ナツ「ん？この匂いは。」

俺がメリオダスの事を考えていると、近くから嗅ぎ慣れた『匂い』を見つけた。

ナツ「は？何でルーシィが此処にいるんだ？」

俺が此処には居ない筈のルーシィの匂いを嗅ぎ取ったことを考えていると。

ナツ「!?」

ナツ「そういうことか!!」

俺はメリオダスの考えに気づき行動した。

ナツ「ルーシィーーーーーーー!!」

俺はルーシィの居る建物の扉を「火龍の鉄拳」で殴り壊し中に入った。

（ナツサイドアウト）

（三人称視点）

ナツがルーシィを探している時、マカロフたちは、消えたメリオダスを探していた。

エルザ「メリオダスーー。」

レビィ「メリオダスーー、何処にいるのーー。」

レビィはメリオダスに助けられたあの日から不思議な感情があった。

レビィ『何か、あの時助けられてから、メリオダスの顔を見ると何か顔が熱くなって胸がズキズキする／／何だろこの気持ち／／』

レビィがこの感情に気づくのはまだ先の話である。

レビィ「ん？何この魔法文字？」

レビィがメリオダスを探しているとメリオダスが立っていた所に小さな魔法文字があった。

その魔法文字にはこう書かれていた。

『これを読んだものに伝える、これを見つけた者、マスターマカロフ、ミラジェーン、エルフマンに俺の身に起きた真相を話す、これはリサーナにだけ話したことだ、場所はリサーナと俺が行った、俺の最初の依頼の森の中だ、夜に待っている。

メリオダス。』

レビィ「!?早くマスターに見せないと!!」

レビィはマカロフの所に急いだ。

レビィ「マスターーー!!」

マカロフ「ん？どうかしたのか？レビィ？」

レビィ「メリオダスの居場所が分かったかもしれないの!!」

マカロフ「なんじゃと!!場所は何処じゃレビィ!!」

レビィ「うん!!こっち!!」

レビィがマカロフをさっきの場所に連れてきてマカロフにさっきの文章を見せた。

マカロフ「なんじゃと!!あやつ!!ワシに話してない秘密があるというのか！」

レビィ「マスター、どうするの？」

マカロフ「とりあえず、ナツを連れて帰ってから話すぞ。」

マカロフ「餓鬼ども!!メリオダスの情報を手に入れた！ナツを連れて

帰ってギルドに帰るぞ!!」

マカロフの声にギルドメンバーが士気を上げ一気に行動していく。

その後、ファントムのギルド本部にいたナツとルーシィを
ギルドに連れ帰り、ギルドへ帰っていった。

メリオダス「ドライグ、アルビオン目覚めたか？」

ドライグ「ああ、なんとかな。」

アルビオン「今回の宿主は驚かされる事が多すぎる。」

メリオダス「ごめんな、でも、お前らの話をギルドのみんなに話すときが来た。」

ドライグ「ついに来たか、この時が。」

アルビオン「話す相手もリサーナしかいなかったからな
話し相手が増えるのは良いな。」

メリオダス「お前等気楽だな、特にアルビオン、お前、
最初の時と違ってずいぶん丸くなったな。」

アルビオン「仕方ないだろう、話し相手がお前かリサーナぐらいしかいないからな」

メリオダス「まあ、それもそうか、まあ、夜が楽しみだな。」

メリオダスの秘められた思いが話される。

（三人称視点終了）